

「旅記録・myギネス」のすすめ

エッセイスト 近藤 節夫

(日本ペンクラブ会員)

一、「旅記録・myギネス」をお勧めするわけ

数年前から「旅記録・myギネス」図の作成と啓蒙に勤しんでいる。旅について講演を依頼されたり、旅好きな人たちとの交流の中でその楽しみと効用を大いにPRしているところである。

最近上梓した拙著「停年オヤジの海外武者修行」(早稲田出版刊)の中でも一項目を設け、筆者自身の「myギネス」図を掲載してそのメリットについて数頁に亘り説明している。

端的に言えば、旅好きな人たちのこれまでの個人的な旅行体験と、旅にまつわる自慢話や旅行上のハッピーングをA4判一枚の用紙にたっぷり書き込んだ旅のプライベート・ヒストリーである。これを見れば作成者の旅行経歴、旅行知識、旅行観、旅行傾向、好みや、運・不運までが分かる。

なぜこんなことをお勧めするかというと、旅好きな人たちというのは、存外自分自身の旅行体験、特に良い思い

出となった素晴らしかった旅行とか、珍しい体験をした旅をその時の臨場感をもって受けとめ、自分自身の記憶の中だけではほとぼる感覚的な気持ちを抑えきれず、誰かに話してみたい、とりわけお互いに旅が好きな仲間には何とか機会を見つけて話してみたいとの強い欲求がありがちなのである。それでいて話を切り出すきっかけが思うように掴めず、気持ちは悶々としている。誰か友だちに聞いて欲しいという気持ちはますます募るばかりである。

そのきっかけを作ってみてはどうかというのが、この「旅記録・myギネス」なのである。この一枚の図を旅好きな仲間の手渡しするだけでいい。まさか折角いただいたものを無闇に捨てることもあるまい。過去の自分の旅で思い出多かつた経験談、印象的な出来事、旅とは直接つながらないが表彰されたような自慢話とか、ドロボーを捕まえたような手柄話など、誰にもできるといえるものではない。自慢話を何でもかんでも一枚の用紙に書き込んでき上がった、このA4紙を誰彼関係なくあげればいい。もらった当座相手は一瞬当惑するかも知れないが、よく見てみれば面白そうなことがたくさん書いてある。悪くたって暇つぶしにはもってこいの代物である。それが環境問題とか道路特定財源のようなお堅い社会的な事件とか、難民問題やテロのような気難しく深刻なものではなく気軽

な旅行話である。いくつもある旅にまつわるストーリーは、本来楽しめるべきものであるだけに、じっと見ているだけで次第に頬が緩んでくる。

ただ、旅に関するものだったら何でもいいということにはならない。話題性があつて読み手が興味を抱いてくれるものでなければ意味がない。それだけに千載一遇の体験、誰もが体験したことのない、とっておきのパフォーマンスなどは話としても興味を惹いて面白い。

度々旅行する人は、是非この手の「Myギネス」作成に励んでもらいたいと思っている。

二、私の「Myギネス」

因みに僭越であるが筆者自身の「Myギネス」を紹介しよう。小さな字で少々見にくいかも知れないが、別冊に九九項目の事件？がリストアップされている。すべて自分自身が経験した自慢話や、怖かった事件や想像もできないアイテムばかりである。もっと他にも掲載してみたい候補はあるが、一応ラインアップを100未満に抑えた。これはキリのいい数字である100の舞台に、もう少しという可能性と期待感を込めて敢えて100件未満に絞った。

この中でいくつか自慢話と啞然とする意外なハッピーニングを紹介することにしよう。

自分なりの考えや目的もあつたが、長い間旅行を生業にした経緯と幸運もあり、度々海外へ出かける機会に恵まれ、現在までに取得した自分名義の旅券は今有効な旅券を含めて一三冊を数える。一九六六年以来これまでに外国へ二〇〇回ほど出かけ、七ヶ国を訪れた。地球を一三周して北は北緯六一度のアンカレッジから南は南緯四三度のクライスト・チャーチまで、高いところではチベット・タングラ峠駅の標高五〇六八mから、低いところでは南アの金鉱山でエレベーターを一度乗り換え、灼熱地獄の地下一七九九mまで潜った。ここまで潜った人には今までお目にかかったことがない。普通の観光旅行では行けるところではないだけに大きな自慢のひとつである。

今凝っているのは世界遺産見学である。今年韓国の世界遺産「宗廟」を見学したが、昨年まで一三九箇所だった見学箇所が、一気に一四三箇所にまで数を重ねたのは、今夏認定された新・世界遺産の中に過去に訪れたところが三箇所あつたのと、一箇所見落としていたからである。まだまだ自動的に増えるかも知れないので、これなら中高齢者になった現在、目標を一五〇から思い切って二〇〇に拡大しても、黄泉の国へ出かけるまでに達成可

能だと信じている。

危険な目に遭ったことも再三である。ベトナム戦争中にサイゴン（現ホーチミン）で銃砲により米兵に脅かされたり、ジャカルタで強盗に襲われ腕時計を強奪されたり、ついには戒厳令下のアンマン市内でヨルダン兵に身柄を拘束されたり、スエズ警察に軟禁されたり、個人的に身の危険を感じたことも一度や二度ではない。大時化の中を中部太平洋のペリリュー島から小さなボートで木の葉のように翻弄されながらアンガウル島まで往復したが、その大波浪の中を見たトビウオの集団による鳥のように舞う飛翔は、ひととき怖さを忘れた感動的な光景だった。

滞在中のホテルで大地震にあったり、ボヤ火災にあつたのが二度、土砂崩れで行く手を阻まれたり、山中で猪に追いかけられたり、本物の野生ライオンと1mの至近距離間にあつたり、冷や汗ものの実体験が山ほどある。しかし、ドゥヴァー海峡を五回も横断したり、マレー半島を七回も縦断したり、外国で大小四八もの島を訪れたり、まああまり一般的ではないことも数多く体験した。

その中で話を聞いた人を狐につままれたような気にさせる出来事がある。あの衝撃的なダイアナ妃の死に絡む物語である。王妃は一九九七年八月三十一日払暁旅行先のパリで不慮の交通事故により三六歳の若さで亡くなった。世界

中が悲しんだあの事故を、その時カナダのバンクーバーに滞在していた私がテレビで知ったのは、何とその前日三〇日午後一時ごろのことだった。普段はあまり意識しない時差というカラクリにより私はダイアナ妃の死をその前日に知ったということになる。こういう偶発性の出来事なんかそう滅多にあるものではない。私はダイアナ妃の死を一日前に知ったという事実を「Myギネス」に堂々と納め、外国人の友人を始め周囲を煙に巻いているのである。

こういうおかしくも、他愛ない自分の身に降りかかった事件は、そこに自分自身が現実にはいたからであり、ポジティブに動かなければ何も起りえない。このような臨場感を伴ったハッピーニングや出来事は大切にして、普段からまとめ整理しておいてすぐ抽斗から引き出せるようにしておいた方がよい。周囲に笑いを誘うことは間違いない。

自分の旅行体験をひけらかし？、周囲に笑いの種を蒔き、旅を語る材料を提供することが、この「Myギネス」を広めようと思うに至ったきっかけである。

三、簡単な「Myギネス」の作り方

別に海外旅行に固執する必要はない。場所や年代にこだわる必要もない。隣のおばちゃんや川に落ちたのを助けたような人命救助だっていい。もう時効になった悪事をばらしてもいい。ただ、読んだ人がニタリとほくそ笑むような事件の方が誰もが楽しくなる。それらをできれば、時系列的にでも並べればそれだけで充分である。どうしても一枚の用紙を埋め尽くせないとか、アイディアが浮かばない場合は、過去に訪れた全国の都道府県名を書いて「制覇した県、全国制覇への道」とでも書けばいい。それを見つけた人が自分もつと多くの県を訪れたと挑戦的に名乗り出てくるだろう。ロープウェイとエレベーターに乗ってモンブランの展望テラスに出れば、喩えアルプス全貌が見えない雨や霧の中にあっても自分は三八四二mの高所に立った、つまり富士山（三七七六m）よりも高い、外国の地で高所到達自己記録を達成した証明となる。何から何まで機械文明に頼り自分の力で登ったのではないにしても、行動したからこそ世界のモンブランのテラスにいるのであって、大いに自慢して良い話である。そうすれば、後から後から私だって登ったという人が立ち現れることだろう。これは話の糸口を作るひとつの手段であり、大いにバイオニアであることを威張るべきである。

「このような「旅記録・mツギネス」を旅行の前でも、その途

中でもいいから全員がお互いに見せ合ってみると、旅仲間
の間で話題が大きく広がり旅への興味が沸々と湧いてく
るのは間違いない。手で描いても、パソコンで作ってもい
から、旅する人がこの図をそれぞれのアイディアで作成し
てお互いに見せ合えば、きつと楽しい会話が醸成され、旅
にも目標が生まれ、旅へ出ることが人生の大きな楽しみ
となり、喜びとなるはずである。

※「旅記録・mツギネス」図解は、本ホームページ上の「図解式
自己紹介」にてご覧いただけます。